

白金藪

1月号



平成29年1月発行

第71号

白金葭定例会句会案内

二月十七日(金) 〃 第四 兼題…雪解、梅

三月一七日(金) 〃 第五 兼題…東風、涅槃

四月二十一日(金) 〃 第三 兼題…霞草、啄木忌

兼題句参考句(二月十七日分 雪解、梅)

月光の休まず照らす雪解川 飯田龍太

にぎはしき雪解雫の伽藍かな 阿波野青畝

雪解田に空より青き空のあり 篠原梵

雪解や安曇の里の道祖神 凡茶

雪とけて村一ぱいの子ども哉 小林一茶

雪解川名山けづる響かな 前田普羅

光堂より一筋の雪解水 有馬朗人

盆中の富士の雪解の眩しかり 松崎鉄之介

しろしろと畠の中の梅一本 阿波野青畝

ねむれぬ夜端はし々ひかる梅の枝 佐藤鬼房

リハビリの夫婦の散歩梅香る 榎戸満洲子

万蕾の梅や鎌倉波の音 阿部禮子

梅一輪一輪ずつの放射能 高野ムツオ

梅の花めぐらせ男耕せり 谷元左登

梅が好き卒寿を過ぎし男の男 難波江昇

梅さくら競ひて咲ける季もありし 牧田清香

月例会会報(’17/1/20 9名欠3

新年一般)

飯田孝三

ペンだこの瘤跡なぞる三ヶ日

受験の子棒の如くに去年今年

かまど猫脱兔のごとく裾の隙_{ひま}

手毬つく唄に日露の戦うた

餅花や年々に背が縮まつて

増田陽一

鮫鰯が口あけて言ふ再会_{アンコール}

酒瓶の影の増えたる去年今年

逆立ちの白鳥泛べ水過ぎゆく

猪鍋やクロマニヨンも来て混る

操り人形_{マリオンネット}の如き老軀を初湯かな

光成高志

白鳥が啼きつつ飛んで初日の出

三月月と太白睦む二日かな

書初や和氣和氣致祥和氣致祥

紀子さん一家に出会ひ初詣

読初や去年のつづき若菜上

光
みち

鶏の声初電車待つてをり

暗闇をきて元朝の駅明り

元日の音なきひと日過ぎにけり

寝正月とて思ひきり怠けをり

倉田紀子

読初や武原はんの句に触れて

四日はや整形外科の混み合へり

利根川の萱の束積むどんど焼

つけて直ぐラジオに答ふ御慶かな

老いばれといはずに慈姑召し上がれ

松村幸一

親子獅子まずは拝み初詣
古利根に立つ波頭冬菜摘む

浅野正美

羽子板の裏絵の薄き梅の花

あらたまと向き合ふ孤独地獄かな

明けきつてみな幻の除夜の鐘

満点の星のままなり今年なり

恋を読む僧を不思議と歌留多取る

吉羽多美子

初詣熱き甘酒手に包む
初優勝なるか初場所稀勢の里
句集手に母の笑みます去年今年
七福神巡りめぐりて幸願う
万蕾の梅二輪ほどほころびぬ

武者昭七

三ヶ日日のあるうちの湯舟かな

熱燭の香りゆたかに新春^{はる}を祝^ほぐ

雪積むや朝の紅茶を吹いて飲む

まつ直ぐに背筋伸ばしてひばり飛ぶ

冬の旅どこか似通ふひとに逢ひ

一筋の冬の陽ざしの湖に照る（琵琶湖夕照）

磯目健二

寒鮎のかそけき引きのいじらしき

返り花雨に打たれて色澄みぬ

寒茜帰投の機影溶け入りぬ

沼涸れて蓮根深く眠るかな

八十路きて花のゆかしき身に沁みる

青木啓泰

初日の出人のかたちは眉二本

初詣狐も狸も出ています

日向ぼこたるんだような犬がゐる

火の見から鐘が下され雪が降る

枯野出てすぐその足で行く映画

小山陽也

隣町年末三日は火の用心

年とりて靴をはいての初詣

年男今年も無事にと手を合はせ

掛軸は大観富士の複製画

九日はマロワールドの演奏会

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

4 三ヶ日日のあるうちの湯舟かな

多美子

4 三日月と太白睦む二日かな

高志

4 暗闇をきて元朝の駅明り

多美子

4 あらたまと向き合ふ孤独地獄かな

幸一

4 羽子板の裏絵の薄き梅の花

〃

3 操り人形^{マリオネット}の如き老軀を初湯かな

陽一

3 元日の音なきひと日過ぎにけり

多美子

3 明けきつてみな幻の除夜の鐘

幸一

2 古利根に立つ波頭冬菜摘む

紀子

2 四日はや整形外科の混み合へり

みち

2 火の見から鐘が下され雪が降る

啓泰

2 句集手に母の笑増す去年今年

正美

句集手に母の笑みます去年今年

2	老いぼれといはず慈姑を召し上がれ 老いぼれといはずに慈姑召し上がれ	みち	1	一筋の冬の陽ざしの湖に照る（琵琶湖夕照）	昭七
2	沼涸れて蓮根深く眠るかな	健二	1	初詣熱き甘酒手に包む	正美
2	手毬つく唄に日露の戦うた	孝三		九日はマロワールドの演奏会	陽也
2	弁天に布に包みて寒卵（布施弁天）	紀子		成人の日マロワールドの演奏会	
2	餅花や年々背が縮まつて	孝三		年男今年も無事にと手を合はせ	陽一
2	餅花や年々に背が縮まつて			鮫鰯が口あけて言ふ再会（アンコール）	みち
2	白鳥が啼きつつ飛んで初日の出	高志		読初や武原はんの句に触れて	健二
1	八十路きて花のゆかしさ身に沁みる	健二		寒鮎のかそけ引きのいじらしき	啓泰
1	熱爛の香りゆたかに新春 ^{はる} を祝 ^{ほぐ}	昭七		枯野出てすぐその足で行く映画	孝三
1	初詣狐も狸も出ています	啓泰		ペンだこの瘤跡なぞる三ケ日	
1	一瞥に空見る猿のちゃんちゃんこ（猿廻し）	紀子		紀子さん一家に出会ひ初詣	高志
1	猪鍋やクロマニヨンも来て混る	陽一		年とりて靴をはいての初詣	陽也
1	七福神巡りめぐりて幸願う	正美		親子獅子まずは拝み初詣	紀子
1	利根川の萱の束積むどんど焼	みち		日向ぼこたるんだような犬がゐる	啓泰
1	恋を読む僧を不思議と歌留多取る	幸一		酒瓶の影の増えたる去年今年	陽一
1	白湯にのむ四粒のくすり雪催	紀子		初優勝なるか初場所稀勢の里	正美
1	白湯にのむくすり四粒や雪催			返り花雨に打たれて色澄みぬ	健二
1	白湯にのむくすり四粒 ^{よんつぶ} 雪催			受験の子棒の如くに去年今年	孝三
1	鶏の声初電車待つてをり	多美子		隣町年末三日は火の用心	陽也
1	読初や去年のつづき若菜上	高志		逆立ちの白鳥泛べ水過ぎゆく	陽一
1	読初や去年につづき若菜上			まつ直ぐに背筋伸ばしてひばり飛ぶ	昭七
1	満点の星のままなり今年なり	幸一		寒茜帰投の機影溶け入りぬ	健二
				かまど猫脱兎のごとく裾の隙 ^{ひま}	孝三

初日の出人のかたちは眉二本

啓泰

書初や和氣和氣致祥和氣致祥

高志

雪積むや朝の紅茶を吹いて飲む

昭七

掛軸は大觀富士の複製画

陽也

万蕾の梅二輪ほどほころびぬ

正美

つけて直ぐラジオに答ふ御慶かな

みち

寝正月とて思ひきり怠けをり

多美子

一句鑑賞

磯目健二

明けきつてみな幻の除夜の鐘

幸一

人間は現在という時を生きつづけるが、その実存は忽ち過去となり記憶と化し失われてゆく。この句の「除夜の鐘」は失われた時の象徴でもある。夜が明けていつもの日常感覚の現在がよみがえる。そこからは、除夜の記憶は、すでに実存の手応えのない夢まぼろしのようである。獲得と喪失、連続と断絶。これからの現在を生き続ける覚悟と、過去の失われた時への諦観が交差する深い句である。

冬の旅どこか似通ふひとに逢ひ

昭七

上五の「冬の旅」は、現実の旅のほか同題の名歌曲集を思わせて叙情豊かな追憶を暗示している。旅の途中、偶然逢ったひとが青春の忘れがたき女性に似ていた。それも「そっくり」でなく「どこか」似ている

ところが、遠い過去の記憶ゆえの曖昧さであり実感がこもる。西欧風の洒落たポエジーを感じさせる佳句である。

三日月と太白睦む二日かな

高志

上弦の三日月と金星があたかも寄り添うようにして東西へ天空を宵から夜半に渡つて行く正月二日特有の天象が眺められる。二つの天体が手を繋ぐように寄り添う有様を「睦む」と擬人化して的確に言い止めたのは見事である。

暗闇をきて元朝の駅明り

多美子

片田舎の社に初詣を済ませて暁闇の道に戻つてくると、前方に駅の明かりが見えてきてほっとする。参詣を終えた満足と日の出前の暗い風景とが浮ぶ清浄感豊かな句である。「駅の明かり」の下五はノスタルジックな余情を感じさせるものがある。故郷への参詣だったのかも。

白鳥が啼きつつ飛んで初日の出

高志

元旦の水辺の叙景句。作者は東天紅とともに飛ぶ白鳥の啼き声をその場で実景として聴いたにちがいない。鶴と初日の出は定番の取り合わせだが、白鳥を持ってきてさらにその啼き声まで登場させたところが新味である。手賀沼周辺の風景か。

一句鑑賞

光成高志

四日はや整形外科の混み合へり

みち

掲句は現代社会の様相をよく捉えている。そこに私は共感する。理由は各自想像するだけで十分。誓子先生の「元日はガソリンスタンドも休む」があり、二日は既に鑑賞された今回の句があり、「四日午後空白の時流れをり」という会社員時代の私の句もある。

句集手に母の笑みまず去年今年

正美

昨年秋に正美さんのお母様の句集が上梓されて本誌でも紹介した。それを手に微笑まれた写真を持参され皆に見せられた。新年を迎える年の変わり目に自分の句集を手持たれてにつこりされているお母様を娘が詠われる。これは致祥の至りである。なお、私が書いた紹介文の中の「今から九年前にご主人と死別された」を「平成九年にご主人と死別された」にと、こんなところで訂正させていただきます。すみませんでした。

あらたまと向き合ふ孤独地獄かな

幸一

新玉と向き合っている孤独地獄であるなあと明けた年に慨嘆している作者である。故吉野俊彦氏の「孤独地獄からの脱却」という鷗外本があった筈で、学問に深く入ると孤独地獄というものがあるのかと思った記憶がある。故に孤独地獄は偉い人がかかるらしいと口

走ったのですが、間違っていたらご容赦を。

操り人形マリオネットの如き老軀を初湯かな

陽一

マリオネットと言えばピノキオを想像する。糸でつられた操り人形。そのようになってしまった老軀に鞭打って初湯に浸かるワイになってしまったわい、とかなんとか自嘲している句。誰がこれを嘲笑できようか。初優勝なるか初場所稀勢の里

正美

なつた なつた。稀勢の里おめでとう。まだ上があるよ。(1/21 18:00)「於春々大哉春と云々」(桃青)の延宝八年新春祝寿の句を進呈したい。ああはるはるおおいなるかなはるとうんぬん。(1/22 17:45)

一句鑑賞

武者昭七

寒鮒のかそけ引きのいじらしき

健二

寒鮒釣りの竿の先にあたりがあった。かすかなあたりである。それを作者は「いじらしい」と感じる。それはかすかであっても寒の冷たさに耐えて懸命に生きようとするいきもののいのちのたしかかな手ごたえなのだ。だから作者はそれをいじらしいと思う。かぼそいのちに寄せる共感。

八十路きて花のゆかしさ身に沁みる

健二

「自然が美しく見えるのは末期の目にうつるからだ」といった芥川龍之介の言葉を実感させられることが最

近多くなつた。若い目に映る自然はあるときは猛々しく、あるときは美麗だけれど、老年の目に見える自然はいつも「愛しみ（かなしみ）」を宿している。

明けきつてみな幻の除夜の鐘

幸一

除夜の鐘の音がすっかり鳴り終えて静寂が立ち戻つてみれば、去年までのあのこと、このこと一切がみんな幻に思えるというのである。除夜の鐘が連続するはずの時間を断ち切つて消してしまうのだ。取り残された「今」だけがある。それは寂しいことだ。

老いぼれといはずに慈姑召し上がれ

みち

姑と嫁さんの会話。「老いぼれ」「老いぼれ」なんておっしゃらずにもっと「くわい」を召し上がれと嫁さん。くわいをカナ書きせずわざわざ「慈姑（慈悲深い姑さん）」としたところに皮肉がひかる。皮肉たつぷりの句。

手毬つく唄に日露の戦うた

孝三

今はもうすっかり消えてしまった路地裏の情景。かつてはそこで女の子たちが日露戦争の唄に合せて軽やかに手毬をついていたものだ。戦争がはげしくなつてからは手毬もなくなつてしまったから戦前までのことだろう。僕なんかも悪童たちと一緒に少し離れてその妙技に目をキラアキラさせながら見入っていたものだ。往時茫々。

餅花や年々背が縮まつて

孝三

「餅花」は繭玉ともいう。小正月に色彩した小さな餅を柳の枝にさして鴨居などに飾つた。手を伸ばしても年々遠くなるばかり。加齢の悲しみ。

一句鑑賞

飯田孝三

三日月と太白睦む二日かな

高志

太白は宵の明星、淡い三日月の影と金星の燦めきが宙に寄り添う。「三日月」は古歌につながる情の月、俳句もこれを踏まえる。「三日月やにほやかにして情けあり」（虚子）。「睦む」と「二日」との阿吽がいのち。「二日」は、ひとの営みの始め、歌始、姫始、斧始・・・、典雅にして艶、なにやら生命の深淵を覗かせる趣、「かな」はふともらす溜息かも。

猪鍋やクロマニヨンも来て混じる

陽一

桁外れの想像力イマジネーションの飛翔ぶりに驚く。ネアンデルタールならぬクロマニヨンが憎い。クロマニオン人は原生人の祖、野牛、トナカイ等の獣骨と混じり骨が出土。原野を猪と駆け回っていたに違いない。彼我、隣り合い鍋をつつくとは愉快。濁酒を交わし、肩を組んで歌い出す、はて歌は何？六本木ヒルズ屋上饗宴なんか最高かな。エスプリ横溢の俳諧に喝采。

初詣熱き甘酒手に包む

正美

句集手に母の笑みます去年今年

〃

初詣を済ませて境内の outlet で熱い甘酒を啜る。境内の寒気に淑氣が漲り、白息を吹きふき啜る口元が見え、湯気が立ちこめる。手に「包む」の情がいい。平談、「初詣」の本意をつく（一句目）。ご母堂はこの程、珠玉の句集を上木された。句集を手にもされる笑顔が目にも浮かぶ。「去年今年」は、お母さんが歩まれた歳月に思いを馳せる感慨につながるだろう（二句目）。

四日はや整形外科の混み合へり

みち

四日は世間の仕事初め。年末年始閉めつ切りの病院・医院が一斉に再開。とたんに老人・子供の患者でどこも一杯。いやはや「整形外科」が手柄、言わず当世風刺して余すない。わが国今や、先進国の最先端。むべむべ「病より転びが怖し老の春」（滑猿）。小児科、呼吸器科では句にならぬ、ご免ついつい蛇足。切れ字「へり」が俳諧を際立たせて外連ない。

弁天に布に包みて寒卵

紀子

前書の布施弁天を知らなかった。悦子さんの「滴りや岩屋の奥の白蛇神」（「悦子句選」碧蹄館選より）が舞台だろう。諾むべ、お供えは「寒卵」。弁天といえは肌はだえ白透く坐像、それを敷くばかりの滑べらかな卵だ。「包みて」の懇ろさがいい。「布」は絹の羽二重と見

たいがどうだろう。いのちをいとおしむ句やかさがめ
でたい。

明けきってみな幻の除夜の鐘

幸一

人の世のみな「幻」は、古今、英傑の言葉や文芸芸能の清粋でお馴なじみだが、振り返る人生の述懐をさり気なくそれに託す。「明けきって」が絶唱、呼応する「除夜の鐘」がずしりと響き交う。手練の一句である。

元日の音なきひと日過ぎにけり

多美子

初詣での寺社界限は別、町中も路地裏もひっそりと静まり返る。そんな元日の氣息をそのまま肌身と感じさせる一句だ。さりげない詠みぶりも適い、「けり」がいまさら利いて、思い一入ひとしおの感がある。

一句鑑賞

増田陽一

明けきってみな幻の除夜の鐘

幸一

除夜の鐘の鳴っているうちはまだ、今年も過ぎて行く・・・と言う感慨に浸ることが出来た。夜が明けて、それは特別な日の筈なのだが、ただの朝ぼらけのようにしらじらとしている。鐘の余韻を境にして幻のように過去は消え、気が付けばわが身独りである・・・こちらにも身につまされる感慨。

あらたま向き合ふ孤独地獄かな

幸一

始め、この「あらたま」は枕詞で、「新玉の歳の初め」

を指すのであろうと思つた。いま、目の前に家族の団欒無く、独りの自己と向き合っている、と言う嘆きかと思つた。けれど「孤独地獄」とは余りにも強い表現で、或は「荒魂、和魂」と言うときの「荒魂（のひと）」と向き合つて、心の通い合わない状態、と見た方が句に即しているかも知れない。普段なら「孤独地獄」などと観念的に強い言葉は使いにくいけれど、敢えて言うほどこの孤独感は深いのである。

三日月と太白睦む二日かな

高志

三日月と太白——つまり宵の明星、金星が接近していた。金星は「太白、昼も見ゆ。」と古文にある如く遊星で最も強い光の星であり、両方とも冴えきつた寒の宵に、ぎらぎらと光を競う如くである・・と読めたけれど、後で二日は「姫始め」でもあるなあ、と気が付いた。そうすると、うまい表現である「睦む」が、もつと柔らかな意味を帯びてくるのだ。但し、常々「擬人法」を否定される作者のこと故、やはり、光度の強い天体が相接近した寒夜の光景であらうか。

冬の旅どこか似通ふひとに逢ひ

昭七

旅の途中、田舎の駅か、街の雑踏か、背景は何処でもよく、ただ行きずりに見た人の貌だけが印象されている。似通つていたのは当然、昔知った女人にであらうことが「ひと」と柔らかな表現で暗示される。ここ

は絶対「冬の旅」でなければならぬ。作者も冬ざれのなかで感傷的な旅をしている・・。

手毬つく唄に日露の戦うた

孝三

子供の歌う手毬唄には、歴史や民話の深い闇が隠されていると言う。掲句はまるで手毬唄のようにリズムがいいのは「うた」の繰り返しにもよるけれど、「唄」と「うた」の表記の違いも周到である。

寒鰯のかそけ引きのいじらしき

健二

手賀沼のヘラブナであらうか。冬の鰯となるとあまり活発ではないけれど、釣り人の工夫する仕掛けには誘惑される。「寒鰯」との頭韻もある「かそけ引き」が実に良くて、一本の糸を通じて交信する、冷たい沼底に息づくものの気配と、それに対する作者の感情が伝わってくる。「いじらしさ」と言うまでもなくそれは解る。

古利根に立つ浪頭冬菜摘む

紀子

古利根は流れではなく淀んだ水かと思うけれど、そこに浪が立つ程、寒風の強い中で菜を摘んでいる。陽だまりには早春の気配もするのであらう。あの辺は藪の臺も芥子菜も早く出る。

老いぼれといはずに慈姑召し上がれ

みち

「ああ、年だなあ・・」と嘆く方に向かつて、そんなこと言っていないで、この慈姑でも召し上がれ、と、

やさしい奥方である。慈姑は正月の伝統的な縁起もので「芽が出るように」とか言うし、「老いぼれ」の言葉にユーモアが加わる。

万蕾の梅二輪ほどほころびぬ

正美

梅の古木に今や蕾がびっしりと膨らんでいて、まだ咲くには一日早い。僅かに二輪だけ、綻びかけたのが見える。この微妙な季節の境目を見つけたのである。

俳窓評論纂

＊朝日新聞 12月26日朝日俳壇の俳句時評に「闇の声を聴け」恩田侑布子が出た。高野ムツオの句集『萬の翅』と『方翅』の短評である。蔵手は夜見の手それも幼き手 飛ぶならば夜の代田をすれすれに 夏雲が供花か棄牛の頭骸骨 土中こそ声あふれおり福寿草 人間の数だけ闇があり吹雪く 以上の五句を鑑賞して、最後に子規の言葉を紹介してムツオの句の総括をしている。即ち、子規は浮華卑俗の文学ほど世を害するものはないといった。ムツオの重層低音ほど、浮薄を軽みと混同したポピュリズム俳句から遠いものではない。まつろわぬ蝦夷の、吹雪からの雄叫び。以上で終わっている。

＊同新聞元日の文化・文芸欄に長谷川權さんの「新しい子規像 描く時」の見出しにて子規が現代に何を問

いかけるのかの文が載った。子規（一八六七～一九〇二）の生誕から今年は一五〇年になる。近代は明治からではなく、社会を動かしていたのは文化の大衆化であって既に徳川家斉の大御所時代（一七七八～一八四一）に始まっていた。芸術学問の愛好者は庶民にまで拡がり、その一つが俳句であった。小林一茶がその代表である。一茶は鬚を結った近代市民だった。「目出度さもちう位也おらが春」などは生の言葉でつづる心理描写は近代そのもの。明治になって子規が写生という方法を与えたことが俳句の大衆化の原動力になった。子規は近代俳句の創始者ではなく中継者だったのである。今は世界中で近代の大衆社会が破綻しつつある。明治は政治の近代化であって、明治とは何か、子規とは何かを放置したまま前へは進めない。今年を新しい子規誕生の年にしたいと結んでいる。

＊皿海達哉さんから井伏文学会誌三号四号二冊が送られてきた。お便り広場にある通り、夏の合同句集のお返しかと思えます。井伏文学とは、井伏鱒二の作品を顕彰する郷土の同好会である。文学ツアーが二〇一一年より始まっているので、本誌と創刊が同じ年である。達哉さんは「井伏鱒二の反骨性・覚書」の題にてそれが感じられる作品を解説されている。二号の安原敬太郎さんの「さざなみ軍記」の主人公知章は茶山の漢詩

からとった創作ではないかという紹介がある。鱒二の父も祖父も漢学の素養があった。その影響を受けて育った。卒寿の鱒二の書齋に茶山三百詩が枕頭にあり詩の軸が懸っていたなどの紹介文もある。

＊「俳句の心と方法」(山本健吉俳句読本第4巻)を健二さんから進呈され、読破した。芭蕉の軽みの論もある。蕪村の画と俳意も考察され、さらに芭蕉終焉の年に軽みの昇華した句がみられるとしている。「秋もはやはらつく雨に月の形」がそれである。楸邨もこれに消え入るばかりの心細さをみている。軽みの代表句とすべきであろう。そして「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」までの解説文を力を入れて書いている。

＊また健二さんから古典文学大系三冊を頂いた。蔵書を整理すべき齢になったとか。また昭七さんから菅茶山(富士川秀郎著)を頂いた。お二人共蔵書に埋もれた生活をされているとか。「芭蕉の軽み以後」は一気に江戸後期に行っています、このまま子規には速すぎ、やはり「虚栗」、「冬の日」の連句をよく吟味して、蕪村・一茶そして子規・虚子・誓子と進むべきと思っておりますので、時宜を得た図書を戴きました。

お便り広場(到着順、敬称略)

前略 2016年も数え日となりました。白金霞12月号

受け取りました。その後体調如何ですか。晶子さんから便りをもらって落着いて生活しているようですとありましたので安心ということか。正月がくるといつても私には何も変化もありません。12月が1月になるだけのことを考えて暮らしています。敏子さんに無理させぬように。来る年はおだやかな年でありますように。賀状は失礼しています。

年の瀬や動く歩道をかけあがる

(12.27 健三)

白金霞12月号拝受致しました。病気で大変な一年でした。よく頑張りましたね。来年も御世話になりました。春には梅の花でまたやりませんか。なにかいろいろ俳句の本があります。まあ元気です。少しはマジメにやらなければと思っています。今日二十四日梅の花で一席やって今年は完了です。来年はさらに良いお年を。

(12.27 陽也)

餘日全く少なくなりました。お忙しくお過ごしのことと存じます。今年はことにいろいろお世話になりました。「白金霞」十二月号に同封いただいた悦子さん追悼特集号拝受いたしました。有難うございました。呉々もご夫妻共々御身お大切になさって下さい。一月例会を楽しみにしています。お礼まで。(12.29 孝三)

白金霞十二月号拝受ありがとうございます。みち様からは折角のポストカード頂きありがとうございます。

こんな押しつまってから、照明をLEDに替えた玄関ドアの塗装をしてもらったりで職人が暗くなっても居るので、こちらの年末の計画いろいろ支障を来たし困っています。お花を買うこと、食物のこと、そうじ、皆中途半端です。皆忙しいのですね。早く頼んでおいた仕事が今になるなんて。お元気で新年をお迎え下さいませ。ごきげんよう。

(1229 璃子)

前略 光成君、お元気ですか？重量感溢るるみなことな合同句集『白金葭』お送りいただきながら、ナシのつぶてのまま年の瀬まで来てしまいました。さぞ御立腹のことでしょう。ごめんなさい。今年は暁の星女子高の非常勤講師として復職、教科書のない高三の「国語表現」と高二の「現代文演習」で、時間と労力の大半を使いました。御誌せめて「ベスト10」でもと頁を繰りましたが、斬新な力作揃い、とても歯が立つものではありませんでした。エッセイもそうですが、「ハガキ句」のまとめ、個人の批評等々、日頃の並々ならぬ研鑽と切磋琢磨の姿に、文字通り圧倒されました。なかなか感想など述べられるものではありません。その内くと思いつながら果せなかつた理由の第一はそのところにあるのです。三月の卒業式を終えるまではどうしようもありません。また改めて拝読させていただきます。答案採点の折り、芋の、いや藷のかな？カリントウは

必需品です。(頼まれて雑な文章を寄せた小冊子を同封させていただきますました。)お茶と一緒に田舎の味を思い出しただければ幸いです。ユーパックは「手紙を入れてはいけない」そうなので、普通の小包扱いにして貰いました。思いつくままの乱文乱筆御赦し下さい。

さい。草々

皿海達哉拝

2016
・12/27



恩師より迎春引菓子到来

高志

(平成二十八年大晦日)

添書き有りの賀状 (1.1) — 喪中にて欠礼しましたが —

お元気ですか。ご健吟をお祈り申し上げます。
遠き日や父が読み手の歌かるた 小俣たか子

この冬は早々の雪のため、強い寒気に見舞われておりますが、反面、筑波山(筑波富士)からの初日に富士山、男体山(日光富士) 浅間富士の三体が白銀に輝いております。まさに淑気です。この四つの富士の淑気の交点(熊谷)で新年を迎えられる喜びを齢八十五歳心底より味わっております。



交点に淑氣凝縮富士四つ

三郎

皆さんもお体を大事にして、自然の恵みに思う存分浸って下さい。頑張りましょう。

平山三郎

昨年はいろいろご指導頂き有難うございました。句会では何かと勉強させられる事が多く毎回楽しみにしております。句誌の編集（その素早さには敬服の外ありません）は大変と思いますが何とぞ無理をしないで下さい。健康第一にお過ごし下さい。

（昭七）

お元氣のことと存じます。こちら、喪中の新年を過ごしております。故、悦子生前の御友誼有難うございました。これからもうよろしくお願い申し上げます。（陽一押）

寒中お見舞い申し上げます。いつもお世話戴き有難うございます。暮れには結構な品々頂き本当に有難うございました。水仙も一層華やかな正月のお花になりました。

これからますます寒くなりますがお二人ともにくれぐれお大事になさって下さいませ。本年もよろしくお願い申し上げます。

（多美子）

佳き新年をお迎えのことゝ存じます。私の方お近くだったら教えを乞い度く何度思ったか。毎月六句やつとです。「軽く楽しく一心に！」思いつくまゝです。七句以上になったら送らせて頂きたいと。

（勝子）

お変わりございませんか。私は週一回シルバー体操に行き、近くはミニバイクが足です。いつまで乗れましか。今年もよろしくお願い致します。

（浩子）

高ちゃん体調はいかがですか？早く元氣になつてネ心配しています。電話するのがおつかなくて失礼しています。高ちゃんの事だから十分気をつけておられる事と信じております。

（ミサ子）

俳句は入り口は易く奥が深いですね。小生この三月で教員生活終了します。

（達哉）

今年もよろしくお願い致します。

凡庸に生きて卒寿の春迎へ

土田野里子

先日は正月をお節料理で迎えてくれてありがとうございます。子供達もお年玉や小太郎との散歩などとても楽しかった様子です。穏やかな三が日から一転して寒さも増していますので、高齢のうえ病み上がりなのでより体をご自愛下さい。心臓や血液は寒暖差に注意して下さい。正月にもらったはつきくを菜那が欲しいとのこと手紙を書きました。良かったら追加下さい。今日は成人の日、会社は出勤日です。電車の中は新成人が多いです。子供たちが成人の日になるまでまだもう少しあります。まだぐ仕事頑張らねばと思います。近況報告まで。電車の中で書いているので乱筆お許し下さい。

（1.9 拓也）

あけましてお目出度うございます。今年も益々御健康と御発展の程を。古代と「おめでとう」(19日着)送りました。会費同封致しました。

(1.14 陽也)

寒中お見舞い申し上げます。お揃いでおすこやかに二〇一七年お迎えと存じ上げます。ことしもよろしくご指導下さいませ。一月東京クラブ会報お届けいたします。今年も白金葎のご発展を願ひご健吟を願っております。又ご指導よろしくお願い申し上げます。

光成高志様みち様

(1.17 長屋璃子)

寒中お見舞い申し上げます。此度はお忙しい中を御鑑選賜りこの上ない幸せを心から感謝申し上げます。その上評価の頁をさいて頂き恐縮して居ります。過日子供一同より出版祝をうけた席での一句を添えて御礼までに認めました。かしこ

初句集祝ひて集ふ梅日和

(25 杉山マサ子)

〈お礼〉遅ればせ鑑賞の駄文をお届けします。先日例会ではお世話になりました。楽しいひと時でした。

「言ひ了せて何かある」考(その二)を拝見『山本健吉読本』の所論は初見にて、興味深く読みました。ご教示有り難うございました。各地で豪雪が頻々、東京近辺の寒さも思ひやられます、ご夫妻共々に、呉々もお体をお大事に。次回を楽しみにしています。

(25 孝三)

受贈誌 (H 29 年 1 月号)

付添も口固結び弓始 (彩 132)

冬籠この句難解眼鏡拭く (〃)

山眠る田の神山に在しみて (〃)

釣舟草無人飛行の飛行船 (〃)

雨上り来れば応と蟬時雨 (〃)

探梅や少女の背丈よく伸びる (あすか 1 月号)

泉水に音を零して松手入 (〃)

大人びた孫の声聞く初電話 (〃)

独り居や鏡の前に初笑 (〃)

初富士を富士塚に立ち拝しけり (東京ク 1 月)

・発電の風車が払ふ恵方道 (〃)

修羅の世をほんの一時冬ごもり (〃)

こだま(山尾かづひろ吟行ノート H 29・1・7)

一枚の落葉をいちる象の鼻

さあ帰る鳥も帰る冬夕焼

初泳後ろ後ろへ水送り

賢治童話 「土神と狐」

ある小高い丘の上に立派な一本の樺の樹があつて、

季節ごとに美しい装いを見せていた。近くに住む狐と

土神が彼女に恋をした。樺の木は狐の方が好きだった。

平野ひろし

〃

河端不二子

渡部和夫

野木桃花

山尾かづひろ

松本草成

村上小五郎

文男

万世遊

璃子

光 みち

飯田孝三

光成高志

武者昭七

土神はぐちやぐちな谷地の中に住んでいて、髪はぼさぼさ、着物はぼろぼろのわかめようだし、いつも裸足で、黒く長い爪をして、性質もひどく粗野で乱暴だったのにくらべて、狐は服装も洒落ていたし、大変上品ふうで知識も豊富だった。狐は訪れてくるといつも星の話やらハイネの詩集の話やらをしては樺の木をうっとりさせた。反対に樺の木はいつも土神に対して冷やかだったから土神はひどく腹を立て嫉妬にからまれるままになんのかかわりのない通りがかりの木こりに乱暴をはたらくという始末である。「おれはいやしけれどともかく神の分際だ。樺の木のことなど忘れてしまえ」とじぶんに言い聞かせてもだめだった。土神はある日ついに樺の木との語らいから帰る途中の狐を襲って殺してしまう。「いきなり狐を地べたに投げつけてぐちやぐちや四、五へん踏みつけました」という残酷ぶりである。こころの奥深くに潜んでいる暗くどす黒い嫉妬という情念が土神をとらえてしまったのである。狐の穴の中に飛び込んだ土神がそこにみたものは、彼が思い描いていた情景とは全然別物だった。狐が得意げに語っていたロンドンタイムスも美学の本も顕微鏡もなんにもなかった。研究室どころかただの暗くがらんとした赤土の穴だった。そして狐のレインコートのかくしの中から出てきたものは茶色の二本の

「かもがや」の穂だった。それを手にした土神は口をあけたままいきなり大声で泣き出した。狐は薄暗い穴の中で、手の届かぬ美しい夢を樺の木に寄りそうことで織り続けていたにすぎなかった。

賢治は詩「小岩井農場」のなかで、もしも正しい願いに燃えて自分とひとと万象と一緒に至上の福祉に到ろうとするそれを、ある「宗教情操」とすれば、自分とたつたもうひとつの魂とどこまでもいっしょに行こうとするのが「恋愛」であり、これは正しい形ではない。「変態」なのだ。ひとはすべて寂しさと悲傷とに耐えて透明な軌道をすすまねばならぬと歌う。賢治にとって恋愛はのりこえられねばならぬ変態であった。

芭蕉のかるみ以後（32）

光成高志

茶山は若い時は藩の政治批判詩を作っていたが、郷里の神辺に塾を開いてから幕政批判をやめた。それは藩主に迷惑がかかるであろうし、塾の経営も危うくなると考え、仕官はせず、農民の側に立つて藩との仲立ちをして農民の利益をはかればよいと思っていたらしい。藩とは福山藩、徳川の親藩である。藩主の阿部正弘が老中となつて幕政を仕切ったのは幕末であり、函館の五稜郭の戦いには日本海を航海して兵を送っていた。鷗外の「伊澤蘭軒」には菅茶山らとの淡々とした

交遊が描かれており、現代では非常に読みにくい史伝であるが、私には面白く感じられた。菅茶山の書簡や詩文が引用され、蘭軒自身の詩文も沢山掲載されており、正確に理解するのはむずかしかったが、文化文政期の時代の雰囲気は感じられた。鎖国時代にあつても、日本の国力が最も充実した時代であつたのだと思う。華やかな庶民文化が花開いたとともに、質の高い文芸活動も展開した。日本文化の歴史においても、最も幸福な時代の一つであつたといえる。だがそれは、鎖国政策によつて海外から隔絶され、日本という狭い島の中で花開いた脆弱な文化でもあつた。日本人は時折長崎を通じて海外の事情に触れることもあつたが、それは彼らの好奇心を満たすにとどまり、決して視野を広げて海外へ雄飛しようとする動きにはつながらなかった。この時代の日本人はいわば、壺中の天を仰ぎつつ生きていたのである。例えば、菅茶山が蘭軒に当てて長い手紙を書き、地方によつて気象は異なることを一々上げて、中秋の江戸の天気を聞いている。江戸は福山と海東二千里も離れているのだからこちらと定めて変わっているだろう、どんな名月の詩を詠まれたのか受けたまわりたく候と問うている。宋人の中秋の月は万里同陰晴という俗説を確かめたくて江戸の蘭軒に手紙を書いたのである。現代なら気象衛星でもつて地

方ごとに天気予報が報じられているのだが、つい二百年前はかかる風流な関心が当時の文化であつたのだ。それはその百年前に芭蕉の句「五月雨の鳩の浮巢を見に行かん」に少し軽みをしたりとした風狂に源を発しているのではなからうか。茶山は生涯に二度江戸に下っているが、江戸における文人たちと隅田川の舟遊びや御茶ノ水での月見やら度重なる探勝や吟行、詩筵に呼ばれている。神田の阿部邸から本郷の伊澤邸を何度も訪れた茶山を想像すると、私にはそれがついこの間のように思えてくる。その帰途の茶山の「林頭りんとう月走り夜雲やうん忙せわし 数店の灯毬とうきゅう閃閃せんせんとして光る 茗水橋辺きようへん行客こうかく少まれなり 満街まんがいの風露ふうろう 新涼を進む」の漢詩（一一八）は御茶ノ水あたりの台風兆す夜の風情がよく描写されている。訓読で読み下したが、平仮名を除けばそのまま原文の漢詩になる。江戸と神田の遠距離には閉口したと思うが、それは手紙のやり取りで克服している。例えば、本郷江戸で朝顔の花作りが流行するという話を聞いて神田の自分の家に伝わる「漳州種の牽牛花」のことを詳しく手紙に書いて江戸の蘭軒に送っていることなどこの化政期の文雅の人々の交流はこのようなものであつた。長閑な些末な叙述と云えばそれまでであるが、このような文化を今の我々が味わえるのも文芸

の余得ではなからうか。以上の逸事は鷗外の「伊澤蘭軒」に詳しい。ここでは菅茶山の晩年に詠まれた先の「姑悪鳴く」のような農村詩をもう少し見ていく。

滂沱雨勢逐人行 滂沱たる雨勢人の行くを逐^おふ

俟聴荷池乱点鳴 俟^{まち}つて聴く荷池に乱点の鳴るを

俄頃奔雲洩残日 俄頃^{たちまち}奔雲残日を洩^ひき

稻田仍有蹈車声 稻田仍^{しき}りに蹈車^{どうしゃ}を踏^ふみ有^あり

激しく降る雨の勢いは人を逐^おいかけるように降る。まもなく蓮池では広葉が大きな音を立て出した。またたく間に夕立雲は通り抜けて、切れ目から夕日が洩れ、稻田では何もなかったように水車を踏み続ける音が聞こえてくる。

こういう詩を読むと、先の七月の手賀沼の豪雨はやはり異常な夕立であつたのだと思ひ起こされる。また嘉久先生の句であつたか、夕立の降り始めを告げる蓮の葉とか蓮田の驟雨は激しく聞こえるなどは今でも誰でも発見できることである。

(H 28 11.1)

増田悦子全句集(陽一著) 感想文(1) 光 みち

一月二十日の句会の席で増田陽一さんより手作りの悦子さんの選句集をいただきましたので、白金葭以前のもので、私の好きな句を口遊んでみました。

昼鳴きて夜はふくらむ青鷗^{あおし}かな

一本の胡瓜を人とキリギリス
やどかりが身を抜くごとく炬燵出づ

埋れ木をつつき鉛筆焦がしけり

衣かつぎ残りの芋は鳥賊と煮る

非常用ラジオを友に初厨

夏果ての遊園地汽車一周す

引越しの荷を濡らしたる春の雪

疣疣の苦瓜刻みたそがるる

落蟬を拾へば指にしがみつく

備長炭匂ひ紀の國はるかなり

こほろぎや夜も働く洗濯機

明け方のかすかな気配蝶の羽化

黄水仙折れたる猫のかよい路

沼辺ゆく朝の挨拶四十雀

シヨパン祀る大理石柱秋暑し

中世の古井戸覗く秋の声

悦子さんの俳句はご自分の身辺をご自分の言葉で偽りのない表現で作られているので、類想類句が少ない。実感がこもっているので生き生きしていて新鮮です。

星野立子や細見綾子調です。チューリップ喜びだけを
持つてゐる、木綿縞着たる單純初日受く ふだん着で
ふだんの心桃の花 これらは綾子のもので、俳句はこ
れで十分だと思います。

蚊遣り火のいつしか果ててをりにけり

からむ蔓触れれば零余子こぼれ落ち

ヒロシマ忌胎児が腹を蹴りにけり

牧草のロール点々牧は秋

傍の辞書を重ねて三尺寝

帰る家違う娘と日短か

花のなき鉢に雨降る秋の暮

川底の石に影置くあめんぼう

咲き切つて背中合せのアマリリス

尖がれるどの支柱にも赤とんぼ

木戸敦子さんのあとがきが面白い。十五才に努力という色紙

を先生から貰って気恥ずかしかったが、五十歳になってフルマ

ラソンに挑戦、五時間の制限時間内に完走した。そのために練

習を六年間重ね努力した結果であった。努力、継続は力なりは

真理なのだと思える齢になったと結んでいる。そう言えば、初

対面なのに待ち合わせた東京駅で私の前に駆けて来た敦子さん

を思い出した。

木村清華

市原みゆき

喜龍けん

佐藤よしと

重原爽美

中沢寿美

仁藤ひろじ

二瓶邦枝

古川正栄

光成高志

我孫子日記

12/16	例会
12/25	注連飾り
1/1	* 初日・初詣
1/6	*2 書初
1/8	*3 あわんとり
1/10	病院
1/11	*4 SOA
1/13	*5 銀座・赤坂見附
1/18	SOA
1/20	例会

*合掌の羽の白鳥初日の出

元日のチワワを撫でて好かれたり

兄弟に健と康の名ごまめ噛む

*2 書初めや何枚も書く和気致祥

書初や勢ひ余る笑ひの字

*3 謹賀新年とんど櫓に掲げあり

とんど焼煤舞ひ落つる火事の煤

どんど待つ子らのけん玉皿廻し

*4 読初は雅友と席を同じうし

*5 初鳩や巖となりしさざれ石

高志

〃

みち

高志

みち

高志

〃

みち

高志

みち

編集後記

ようやく新年号の編集が終わりました。どうしても16頁には納まりません。昨年 of 合同句集の余韻がかなりの方からお便りを頂きました。恩師の山田先生から迎春引菓子を送られて来ました。先輩の皿海達哉

さんから率直な手紙とカリントウが送られてきました。陽也さんから新年は「お目出とう」の銘菓を戴きました。毎月の「古代」の差し入れを頂きますのにお礼を言う暇もなく失礼しております。毎月は書きませんが今年のまとめたお礼とさせて下さい。私は心が一杯になると口下手になるものですから、偉そうぶっているとよく誤解されて来ましたので、ここで弁解しておきます。

今年はどういう年になるのでしょうか。昨年一昨年のような異変のない穏やかな日々がつづくことを願っています。どうか皆様におかれましても心づくしの氣持が起りましたら、文章にされて送り下さい。小誌ではありますが、全部電子化して文章に残します。人はその姿は伝え易いのですが、その心は伝え難いと思われまので、せめてその心を文芸の形で残しておきたいと思っています。許六が江戸を離れて郷里の彦根へ帰るとき芭蕉が残した「柴門ノ辭」という餞別文の最後を写して新年の後記としたい。

『予が風雅は。夏炉冬扇のごとし。衆にさかひて用所なし。たゞ釈阿。西行のことばのみ。かり初にいひちらされし。あだなるたはふれごと。あはれる處おほし。後鳥羽上皇のかゝせ給いひしものにも。これらは歌に實ありて。しかもかなしびをそふると。の給ひ

侍りしとかや。されば此御みこと葉を力とし。其ほそき一すじをたどりうしなふ事なかれ。猶古人の跡をもとめず。古人のもとめたる所をもとめよと。南山大師の筆の道にも見えたり。風雅も又これに同じといひて灯をかゝげて。柴門の外におくりてわかるゝのみ。』

(元禄6年1693年四月 芭蕉)

こんなあとがきを書く、ミサ子さんのハガキではないが、高ちゃんはずかしわと言われそうですが、決してそんな男ではありません。東京の良子さんは面白い人ですねと度々みちさんに話しているらしく、これは褒めてもらっているものと思っております。

白金霞 1月号 (第71号) 平成29年1月発行

編集・発行人 光成高志…(〇四)七二八七—一〇六八

発行所 270・1119 我孫子市南新木2・14・17

表紙の題字…加納綾女 写真…1月22日の白金霞